

長田夏樹氏の北京語ローマ字表記案について

中村雅之

1. 北京語のローマ字表記

中国語のローマ字表記は、16 紀末のリッチ (Matteo Ricci) やルツジェーリ (Michele Ruggieri) 以来、多くの西欧の宣教師や外交官によってなされてきたが、そのほとんどは北京語ではなく官話 (いわゆる南京官話) を対象としていた。北京音の体系を意識してローマ字表記を試みたのは、19 世紀半ばのエドキンズ (Joseph Edkins) が最初であろう<sup>1</sup>。ただし、エドキンズは北京語を官話の一変種として扱ったために、そのローマ字表記においても、不必要な入声韻尾「-h」(南京官話の声門閉鎖音のための表記) を用いるなど、あくまでも官話の型にはめて北京語を記した。

わずかに遅れて、ウェイド (Thomas F. Wade) が初めての本格的な北京語学習書を著すことになる<sup>2</sup>。その表記は北京音を体系的に記述したものと言えるが、一部分 (ピンインの *ge/ke/he* に当たる表記) に非北京語的な (すなわち南京官話的な) 綴りが見える<sup>3</sup>。また、ピンインの「j/q/x」と「zh/ch/sh」に相当する声母について、ウェイド式では「j」と「zh」をともに「ch」とし、「q」と「ch」をともに「ch'」をすることもかわらず、「x」と「sh」はそれぞれ「hs」と「sh」で区別するなど、体系的でない部分を含む<sup>4</sup>。

1930 年前後に瞿秋白・蕭三らによって作成されたラテン化新文字は後のピンインの成立に多大な影響を及ぼしたが、北京語の音声を体系化したものではない。当初の瞿秋白の草案では南京官話を意識した表記であり<sup>5</sup>、蕭三らによる改正後は北方音に改めたが、尖団の区別は残した。

ほぼ同時期に趙元任らによって考案された国語ローマ字は、北京音を体系的に表し得るものであったが、声調を綴りの中に取り込んだ表記法があまりに煩瑣で実用性に問題があった。

1958 年のピンイン (拼音字母) の施行に至って、北京音が過不足なく記述されることになった。

2. 長田夏樹氏の表記法<sup>6</sup>

長田 1951 は北京語のローマ字表記案であるが、具体的には長田氏自身が述べるように“注音符号のローマ字転写”を目指したものである。1951 年当時において、北京語を体系的かつ合理的に

<sup>1</sup> Edkins J., 1857, *Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, Shanghai: London Mission Press.

Edkins, J., 1862, *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language*, Shanghai: London Mission Press.

これらでは南京官話を中心に据えつつ、北京語の記述もおこなっている。

<sup>2</sup> Wade, T.F., 1859, *The Hsin Ching Lu (尋津録), or Book of Experiments; being the First of a Series of Contribution to the Study of Chinese*, Hongkong.

Wade, T.F., 1867; 1886<sup>2</sup>, 『語言自邇集』。

<sup>3</sup> 中村雅之 2006b, 「トマス・ウェイドの北京語表記「-o/-ê」について」, 『KOTONOHA』49.

<sup>4</sup> 中村雅之 2008, 「ウェイド式ローマ字のそり舌音——満洲文字表記との類似」, 『KOTONOHA』64.

<sup>5</sup> 中村雅之 2006a, 「ラテン化新文字は山東方言か」, 『KOTONOHA』48.

<sup>6</sup> 長田夏樹 1951, 「北京語のローマ字表記法に就いて」, 『神戸外大論叢』2-1.

記述するローマ字表記はなかった。最も合理的な表記が注音符号であったため、それを基に北京語のローマ字表記を考案したのである。以下に、表記例として挙げられた「老残遊記」の一部分を示しておく<sup>7</sup>。

説着，只見門簾一響，進來兩個妓女：前頭一個有十七八歲，鴨蛋臉兒；後頭一個有十五六歲，瓜子臉兒。

Shuōzhə, zhǐjiàn ménlián isjiǎng zjīnlǎilə liǎnggə zjì'nỹ; cjiántəu ígə iə̃ u sh' cji-bā suèi, iādàn-liār; xətəu ígə iə̃ u sh' ũ-liəu suèi, guāz-liār.

ピンインとの主な違いは以下の点である。

- ① 「j/q/x」に当たる綴りを「zj/cj/sj」とすること。
- ② 「e」を「ə」と「e」の2類に分けること。(注音符号に倣ったもの)
- ③ 「ü」を「y」とすること。
- ④ 「zi/ci/si/zi/chi/sh/ri」の母音を「z/c/s/zh/ch/sh/rh」のようにゼロ表記とすること。

このうち②については、印刷上の便宜のためには「e」に統一してもよいとされている。長田式表記は全般的にラテン化新文字とピンインの中間的な表記という印象を受ける。長田式もピンインもラテン化新文字を土台にしているが、方針に若干の違いが見られる。長田式は、舌面音では「zj/cj/sj」として共通の綴り「-j」を含み、そり舌音ではラテン化新文字同様に「zh/ch/sh/rh」として「-h」を含むことで、それぞれの音声特徴を可視的にしている。一方、ピンインではできる限り一字一音の原則に従うべく舌面音に「j/q/x」を採用し、そり舌においても不整合ながら「r」のみを「rh」とせず一字としたものであろう。

### 3. 長田 1951 の歴史的意義

長田 1951 の意義は、官話と北京語を截然と区別し、北京語の音声特徴を明瞭に反映した表記を考案した点にある。氏は北京語の歴史的な研究を視野に入れて、その記述に耐えうる表記を用意しようとしたのである。19 世紀後半から 20 世紀前半に考案されたローマ字表記は、エドキンズ式やラテン化新文字のように、官話と北京語の区別が曖昧であったり、ウェイド式や国語ローマ字のように、舌面音とそり舌音の声母を共通の字母で表すなど北京語の体系に十分即していなかった。したがって、それらは北京語の音韻史を研究する際に安心して利用できるものではなかったのである。

北京音の歴史的な研究、たとえば文語音の起源や尖音と団音の合流などを検討する際に、官話(南京官話)と北京語を区別して考えることが必要であるが、長田氏以前にはしばしば混同があった。長田 1951 を遡ること僅か十数年の有坂秀世の研究<sup>8</sup>においてさえ、「北京官話」の名の下に、

<sup>7</sup> 表記例の引用において、「ə̃」「ỹ」のように声調記号がずれているのは単純に技術的な問題で、原文では母音の上に付されている。なお、二か所に見える「歳」のローマ字表記が「suèi」と「suèi」で異なっているが、後者が正しい。また、「進來」に対して「zjīnlǎilə」と表音されるなど、原文の表記例には他にも不整合や誤記が多く見られる。

<sup>8</sup> 有坂秀世 1936, 「入声韻尾消失の過程」『音声学協会会報』41. (のち『国語音韻史の研究』増補新版所収, 三省堂, 1957)

官話と北京語とが混同されていたのである。長田氏がわざわざ自前のローマ字表記を考案してまで「北京音」の体系を確認した意味はここにある。

この長田式ローマ字表記は、二年後に発表した北京語文語音の研究<sup>9</sup>において実用化されることになる。北京音の真の歴史的研究は、長田 1951 と長田 1953 に始まると言ってよいのではないか。

---

<sup>9</sup> 長田夏樹1953, 「北京文語音の起源に就いて」『中国語学研究会会報』11. のち『長田夏樹先生追悼集』pp.45-49所収, 好文出版, 2011.